

アプリで即情報共有

災害に「あつ」

記録的大雨を教訓に

5

豪雨に見舞われた昨年八月四日、白山市の林中地区では、スマートフォンで情報を共有できるアプリ「結ネット」が、住民への迅速な情報伝達や安否確認に威力を発揮した。今後さらに普及させ、減災や防災につなげようとしている。

アプリは、金沢市のソフト開発会社「CPU」が手がけた。主に町内会の行事や会議の日程調整に使われている。昨年七月に導入した林中地区は、アプリの掲示板機能に着目した。

地区の町会長や各委員会の役員らが、登録した住民と各種の連絡を取り合うほか、災害時には全登録者に情報を一斉送信。着信音などで知らせる「災害モード」に切り替えることがで

め、公民館で土のう二十個を提供し、家屋の浸水を防いだ。

地区協議会の竹中和幸会長(68)は、手応えを感じた。当日は交流サイト(SNS)上の市公式アカウンでも災害情報を発信していたが、「自分の住む地区に向けての情報をその都

の対応、スマホを持たない独居の高齢者への情報発信や安全確認をどうするか。登録した近隣住民をサポートに指定し、緊急時に駆け付けて安否を確かめるといった対策も検討している。

大西さんは「豪雨災害で、利用価値があることを強く実感した。地区で開く防災訓練を通じて、住民の皆さんに有効性を知ってもらい、防災態勢の強化につなげていきたい」と話している。(安里秀太郎)

白山・林中地区で活用



豪雨当日に情報共有アプリ「結ネット」に投稿された災害情報を示す大西直昭館長(白山市乙丸町)